

## 第5章

# 事業の成果

- 団長報告
- ディスカッション成果
- 事業アンケート



## 団長の中国初体験訪問記

伊藤 信

### はじめに

6月下旬に青年国際交流担当への異動の内示があり、それと同時に日中青年交流事業の団長を務めてほしいという依頼を正式に受けた。12年前に同じ担当の参事官を務めていたときには、「東南アジア青年の船」事業の管理官として乗船したため、同時期に実施されていた日中交流事業については、直前の準備や事業実施の状況をリアルタイムで把握することがほとんどできなかった。派遣事業の最終日にあった成果発表や帰国懇談会には出席したが、どこか「アウェイ感」を抱いたまま事業が終わってしまった苦い記憶が今も残る。

現在の日中交流事業は、当時と異なり、派遣と招聘が合体して、日中の青年が両国で日程を共にしながら互いに交流するプログラムになったこと、また中国代表青年が学生中心となり、年齢層が日本代表青年とより近くなっているなど内容に変化がある。

今回の団長の職務は、そうした変化を踏まえつつ、過去の忘れ物を取りに行くような気分で引き受けた。

### 事前研修

着任して10日目にはもう事前研修である。選考には関与していないので、ここで15人の参加青年、そして西部副団長と渉外の金丸、藤澤両氏に初めて出会った。自己紹介で、最近顔と名前がすぐには一致させられなくなったと予防線を張りつつ、自己紹介シートを参照しながら3日間何とかなら顔と名前は一致させた。

この研修では、来るべき交流活動に向けての役割分担や団としてのテーマ等を決めしたが、リーダー役の決定からその後の各テーマの話合いに至るまで、決めなければならないことが次々スピーディーに決まってく様は見ている大変気持ちがよかった。西部副団長の捌きが寄与するところも大きかったと思うが、固い雰囲気やぎこちなさが続いたら私も乗り出さなければならない場面もあるかな、でもどうやって?と思っていたのが全くの杞憂に終わった。

### 事業本番に向けての準備

公式行事における挨拶は、団長の最も重要な任務である。スピーチは誰でもできる通り一遍のものにしたくないので、何か私らしい要素を入れたいと考えた。しかし、私は返還前の香港の空港以外、中国大陸に降り立ったことが

なく(法的には「入国」していない)、家族まで広げても中国について語れるネタがない。そこで、今回事業の訪問先を調べたところ、浙江省と杭州市は、たまたま私の故郷福井県、福井市とそれぞれ姉妹関係にあり、紹興市も作家魯迅と「藤野先生」(仙台医専教授藤野厳九郎)の縁から、同氏の出身地福井県あわら市と姉妹都市であることを知った。これだけでは本当に「個人的」な話とは言い難いと思い、本番直前の10月末に実家に帰省した際には、あわら市まで行って「藤野厳九郎記念館」を参観し、魯迅と藤野先生のつながりを再確認してきた。聞き手にどれくらい響いたかは分からないが、これらのことを挨拶のほか、中国での要人との会話の中に最大限盛り込んだ。

福井絡みといえば、事前研修中に中国大使館を訪問したときに杭州市を紹介する中で、数ある姉妹都市の中で福井市についてのみ触れていた。先方の王琳公使参事官に、私の経歴を踏まえてこのようにされたのですかと尋ねたが、はっきりとしたお答えはいただけなかった。

事前研修終了後は、オンラインの自主研修で、準備が着々と進んでいることを時折確認しているうちに、事業本番が近づいてきた。職場にあった本や、今年の団長から借りた現代中国に関する新書を読むとともに、にわかにDuolingoで中国語の勉強を始め、できる限りで頭の中の準備もした。現地では、挨拶のほか“洗手间”ぐらいしか聞き取れなかったが、団長挨拶は、中国でのプログラムのどのイベントのどのタイミングで求められるのかがぎりぎりまではっきりしなかったものがあり、いくつかは中国に渡ってからの作成となった。

### 日本国内プログラム

出発前研修で4か月ぶりに再会した青年たちは、集合しただけは若干緊張しているようにも見えたが、すぐに和気あいあいとした雰囲気になっていた。日韓交流事業で参加青年のケアが必要な場面があったと聞いていたため、気負いすぎて心身ともに無理をしないよう何度か注意喚起したが、結果的に大きな事故なく事業を終えることができ、安堵している。

翌日からは中国の青年たちを迎えていよいよ事業本番である。

ディスカッションでは、各グループが多様な視点で発表内容をまとめ、日本社会の現場に触れた中国青年の感想

も多彩で、聞いていて大変面白かった。企業視察や川越での収穫体験など、私にとっても学びの多いプログラムとなり、中間発表ではその内容に負けないよう冷や汗をかきながら講評を述べたことも思い出深い。

中国団の黄団長とは行程を通じて行動を共にする時間が長く、常に旺盛な好奇心で質問が途切れない方であった。東京の住宅価格(昨年の団長報告でも問われたと書かれていた)、高齢者就業率、高齢社会政策の府省間役割分担、トヨタアルファードの価格帯など次々と質問が飛び、私の知識では足りないところはその都度ネットで調べた。私の持っていたビジネスバッグにも強い関心を示され、私も知らなかった素材や生産国まで問われてこれも検索した。最終的に私の物より高級な日本製の革鞆を購入され、御満悦であった。日本最終夜には、黄団長の希望で公式行事終了後に居酒屋に同行し、大量の串焼きを前にくださった雰囲気を楽しんだ。

## 中国プログラム

6時にホテルを発って羽田から上海へ向かった。今回の行程はすべてバス移動であったが、上海から杭州への道中では、市街まで通勤時間がかかりそうなところでも高層住宅が林立しており、世界レベルの大都市が連なる地域であるにしても、これらへの入居率がどのくらいなのか気になった。車窓に高速鉄道の高架が延々と続き、鉄道好きとしてはそちらにも乗りたかったところであるが、大荷物を抱えてバスと鉄道を乗り継ぐのは大変だし、上海と杭州、紹興ぐらの距離だと、トータルの所要時間もバスのみと大きく変わらないのであろう。また中国を訪れるモチベーションとして取っておくこととしたい。

杭州のホテル到着後のオリエンテーションで詳細日程が明らかとなり、ここから本格的に中国側のプログラムが始まった。表敬した浙江省青年連合会の書記は元バレーボール中国代表でオリンピック金メダリストという経歴を持つ方で、同省への訪問に対し温かい歓迎の言葉をいただいた。

その日の夜は歓迎会を開いていただき、翌日からは視察やディスカッションの時間が続く。まず初めに浙江工商大学を訪問してフォーラムが開催された。同大学の学生パフォーマンスや講演、日中青年の発表が行われ、ラジオ体操や「朋友」の合唱では全員が一体となって盛り上がった。ディスカッションのテーマは、当初、現代の遣唐使として日本が中国から持ち帰りたい「文明の種」は何か、となっていて若干気になったが、実際には両国が互いに学び合いたい物事を双方向的に話し合うこととなっていて安心した。

杭州人工知能タウンは、アリババやディープシークを生んだ当地の広大なAI産業集積拠点であるが、時間の制約のある中、展示スペースを駆け足で回ることとなった。パッと見て凄い、という直感があったが、私の情報処理能力を

超えてしまい、もう少しじっくりと見たかったところである。デジタルノマド交流ラウンジも、実際に入居されている方のお話を聞けるとなおよかったと思う。世界遺産の西湖の夜間遊覧は、ライトアップされた周囲の木々も美しかったが、今度は昼の姿も見てみたい。

中国シルク博物館では産業としての5000年の歴史と精緻な刺繍の展示に圧倒された。絞り染めの体験があったが、染める布を縛って模様をつけるための輪ゴムを巻くのに手こずり、それを染色液に漬けるのは私が最後になってしまった。

紹興に移動し、まずは浙江一景エコ牧場の見学と農作業体験を行った。どこが「エコ」なのかの説明は、翌日通訳の柳さんを通じて伺った。農作業体験は大根の葉の収穫であったが、根を掘り出すのはコストに見合わないからそのまま肥料にすると聞いて驚いた。商品化しないものならば、と土から顔を出している根の部分を少し切り取って食べてみた。辛みがなく、さくさくと美味しいと思った。その日の夜には、急遽、市の行政センターにおいて浙江省青年連合会等の幹部と会食をすることとなり、青年たちとは別行動となった。

安昌古鎮では古くからの街並みを視察したが、数多く並ぶ露店では、必ずと言っていいほどWeChat PayとAlipayのQRコードを掲示しており、キャッシュレスエコノミーの浸透を目の当たりにした。魯迅の旧居は、静謐な雰囲気の中で文人の生涯に心を寄せるものと思いついていたところ、平日でも多くの人で賑わう大観光地だったことが衝撃的であった。魯迅の人気ぶりを肌で感じることもあった。

閉会式と銘打った報告会では、両国の青年が今回のテーマに沿って成果を発表し、これまでのプログラムを通じて互いの国の良いと思った点などを率直に伝え合った。

最終日は、紹興酒博物館を訪れる前に急遽淡水真珠の店に短時間立ち寄った。博物館では紹興酒製造の歴史に触れた後に試飲し、勧められるがままに木箱入りのもの土産として購入した。中国青年たちとは、この博物館と紹興北駅で相次いで別れを告げた。上海総領事館訪問を約束した時間に照らすとバスが遅れ気味であったことも、若干慌ただしいお別れとなった。

総領事館では、岡田総領事・大使から名調子で管轄地域の解説をいただくともに、青年代表から事業報告を行い、中国でのプログラムを終えて帰国の途についた。

## 団長としての雑感

久しぶりに青年国際交流の現場を体験し、両国の青年が「互いの違い」も材料としながら闊達に交流を行っていたことが印象的であった。報道や政治情勢をめぐる認識、制度の仕組み、価値観、物事を決める際のスピード感など、私自身も、今回の事業を通じて、両国の間に多くの相違点、差異があることを実感した。違いがあるから互いに理解しあ

えないというわけではないのであって、現地での挨拶でも申し上げたが、その違いの背景が一体どこにあるのか掘り下げながら、互いに折り合えるところを追求していくということではないかと考えている。高原先生が講義の中でおっしゃっていた、日本には「戦略的忍耐」が必要、という言葉がずっと心に引っかかっている。本事業が終了したところから日中関係は厳しい状況が続いているが、今でもこの考えには変わりはない。

また、違いといえば、青年たちの発表でも、日本のプログラムは時間厳守で日程もかっちりしていることと、中国側の柔軟性の対比を指摘するものがあった。過去の日本の団長の報告にも、現地で日程変更があったことを述べているものがあった。今回、黄団長から、食事の会場(前述の、小人数だけが夕食に赴いた紹興市の行政センターとは異なる)について、幹部の事前視察で立ち寄ったところが良かったのでそこに変えた、という話も伺った。中国での最終日、浙江省名産の淡水真珠の店に立ち寄ることになったのは、その日の朝食を黄団長と共にしていたときであり、そうなったきっかけは、私が黄団長との会話の中で淡水真珠に興味を示したことであった。日本にいる間に詳細な日程がわからなかったことも含め、ハラハラすることも何度かあったが、中国側からすれば、事業をより良いものにしようとして最後まで調整を続けた結果、ということであろうと推測する。ハプニングも旅のスパイスとして楽しむぐらいの心構えでいるのが吉ということであろう。

習近平政権下での「上からの指示」(いわゆる「儉約令」であろう)により、使用するホテルや会合の持ち方に制約があるという説明を何度か受けたが、ホテルは、タイプは違えどいずれも十分な設備と快適さを備えており、食事も質・量ともに豊かで、不満を言っても申し訳ないというレベルのものであった。

本事業の日程は日中共に朝早くから夕食時まで、移動の時間はあれどみっちりと行事が組まれている。それぞれの国で5日間しかない以上致し方ないのであるが、都内視

察を含め、青年たちの自由になる時間をもう少し長くしてもいいのではないかと思う。安全確保との両立は必要であるが。

## おわりに

今回の事業は、私自身にとっても「原点の再確認」となった。12年前に十分に関われなかった日中交流事業に、今度は現場責任者として関わり、青年たちが実際に交流活動を行っているのを間近で見届けることができた。中国初訪問の私にとっては、青年と同様に驚き、学び、考え続けた10日間であった。この経験を通じて、交流事業は単に相手国を知る機会というだけではなく、自国と自分自身を相対化し、捉え直す機会でもあるということに改めて理解したつもりである。

今年度の事業が終わった今、日中両国の青年が、今回の出会いと交流をきっかけとして「永遠的朋友」として、政府とは離れたかたちで未来にわたって関係を築き続けること、そして両国で人脈を広げていくことを期待したい。

今回の事業を無事に終えることができたのは、日本側・中国側双方の青年の努力、そして西部・今井両副団長、金丸・藤澤両渉外担当の尽力によるものである。西部さんには、参加青年の先輩として、事前研修のアイスブレイクから事業期間中の団員との連絡役として各方面で活躍をいただいた。今井さんには、内閣府における事業担当として、事前準備や、自主研修時の内閣府からの説明等の役割を果たしていただいた。金丸さん、藤澤さんには、中国語の全くできない団長の意思疎通や作成がぎりぎりになった挨拶文の中国語訳の作成等、特に現場で大変お世話になった。心より感謝申し上げる。

最後に、今回得た経験は私にとっても「12年前の忘れ物」を取り戻す機会となった。今回の事業の経験も今後の改善のための礎として、日中両国の未来を担う青年の交流が更に発展していくことを願ってやまない。



同郷の先人とツーショット  
(藤野巖九郎像 於魯迅故居)



団員の皆さんに寄せ書きをいただきました 感謝

# ディスカッション成果

## 日本プログラムディスカッション全体概要

日 時	令和7年11月5日
場 所	東京 ホテルグランドヒル市ヶ谷
テ ー マ	テーマ1:「新しい時代の働き方」 サブテーマ1:都市と地方の働き方 サブテーマ2:男女の働き方 サブテーマ3:外国人材の受入れ  テーマ2:「文化と伝統」 サブテーマ1:アイデンティティ サブテーマ2:伝統的価値観 サブテーマ3:伝統芸術
参 加 者	日本青年15名 中国青年18名
スケジュール	9:00～10:30 基調講演 「日中関係の未来—相互理解を深め、共に平和を築こう」 講師:高原明生 先生(東京女子大学 特別客員教授) 11:30～14:00 テーマ別施設訪問:新しい時代の働き方 株式会社 パソナJOBHUB訪問 14:30～16:00 ディスカッション (テーマ:①新しい時代の働き方 ②文化と伝統) 16:00～16:30 発表準備 16:30～17:30 ディスカッション成果の共有会



## ディスカッショングループ別成果

テーマ1 サブテーマ1概要	
テーマ	新しい時代の働き方
グループテーマ	都市と地方の働き方
参加者	日本青年 3名 中国青年 3名
成果	
<p><b>1. 中国の現状</b></p> <p>以下三点について議論した。</p> <p>第一に、労働環境の激化についてである。都市部、特にハイテク企業では「996(朝9時から夜9時、週6日勤務)」や「007(24時間待機)」と呼ばれる過酷な労働慣行が存在する点が指摘された。</p> <p>第二に、デジタルの弊害である。テレワークの普及により、時間や場所を問わず連絡が来る「隠れ残業」が常態化し、公私の境界が消失している現状がある。</p> <p>最後に、地域格差と流動についてである。教育や就職機会の格差による地方から都市への流入が続く一方、近年は都市で経験を積んだ若者が地方へ戻り(Uターン)、イノベーションを起こす事例も増加している点も確認された。</p> <p><b>2. 日本の現状</b></p> <p>大きく以下二点について議論した。</p> <p>第一に、都市への集中という点である。大学やキャリアの選択肢が東京などの大都市圏に集中しており、地方出身者の流出が継続している潮流について議論した。</p> <p>第二に、地方の疲弊についてである。地方では深刻な人手不足に加え、最低賃金の低さが課題となっている。生活コストの安さや自然環境を求めて地方に残る層もいるものの、経済的なインセンティブが弱い点が構造的な問題として挙げられる。</p> <p><b>3. 上記現状から学んだこと、気が付いたこと</b></p> <p>以上の両国の抱える諸問題の議論を通じて、以下の提言をするに至った。</p> <p>今後の両国において、「デジタルを取り入れつつ、地域特性や個人の生活の質(QOL)に応じた柔軟な仕組みを構築すべきである」という点である。この提言は、以上の議論を踏まえた、以下二点の根拠に基づいている。</p> <p>第一に、技術と人間性の調和の重要性だ。確かに、昨今のDXやAIの活用により、地方に住みながら都市の仕事を行うことは技術的に可能である。一方、単なる効率化の追求は人間関係の希薄化や労働強化を招く恐れがあり、双方を両立(調和)させることが重要である。</p> <p>第二に、多様な選択肢を保障することだ。日々、加速度的に変化する社会に生きているからこそ、これまでの定量的な経済成長だけでなく、家族との時間や個人の価値観に合わせて「働き方を選べる幅」を設定する政策が求められる。</p>	

テーマ1 サブテーマ2 概要	
テーマ	新しい時代の働き方
グループテーマ	男女の働き方
参加者	日本青年 2名 中国青年 3名
成果	
<p><b>1. 中国の現状</b></p> <p>労働市場における中国と日本の大きな違いは「人材の過不足」についてである。日本は人材が不足しているのに対し、中国は人材が余っており、それにより以下2点の男女の働き方に関する特徴がある。</p> <p>一つ目は、就職に関して男女間で不平等があるという点である。企業が採用する人材を選ぶ際、ポストが限られているため、出産などの理由によりキャリアを中断する可能性がある女性よりも男性を選ぶ傾向がある。</p> <p>二つ目は、育児休暇の取得率が日本に比べて低いという点である。中国青年からは「身近な男性で育児休暇を取得した人はいない」や「就職も難しく、経済的に厳しい状況下で男性が育児休暇を取得する必要はないと考える人も多い」という発言があった。</p> <p>一方、社会が変化する中で、国としても「男女平等」や「家庭に優しい社会」を重視しており、浙江省は、幸福度が高く、男女ともに活躍できる企業が集まるモデルエリアとなっている。具体的には、育児休暇の日数を増やしたり、フレキシブルな働き方を推進したりしていることが分かった。</p> <p><b>2. 日本の現状</b></p> <p>日本において、働く女性は増えているが、結婚や出産でキャリアを中断する女性も少なくはない現状である。このような課題の解決策として、勤務地限定正社員制度などの「多様な正社員制度」を紹介した。当該制度を導入する企業は年々増加しており、日本政府も推進している。このような制度がさらに浸透していくと、より男女ともに働きやすい環境になると考えられる。また、日本青年の発表後の質疑応答において、勤務地に関して、中国では原則として省を超えた異動は無く、日本ほど異動・転勤が無いことが判明した。</p> <p>日本では女性の社会進出が進む中で、男性が育児に積極的に参加できる社会環境作りが求められている。男性の育児休業の取得率は年々上昇しており、令和6年度は40.5%であったが、女性の取得率と比較すると依然として低い。その要因は、職場の雰囲気や企業文化の問題、経済的な不安、サポート制度や情報の理解不足が挙げられるが、最も大きな要因はキャリアへの影響を不安に感じるのではないかと考えられる。</p> <p><b>3. 上記現状から学んだこと、気が付いたこと</b></p> <p>ディスカッションを通じて、日本と中国では、人材の過不足、異動の有無及び育休の浸透状況などにおいて相違点があったが、性別を問わず全員が働きやすい社会を目指していることは共通していた。また、「中国で育休があまり浸透していない要因の一つは人材が余っていることである」など、各国の制度や現状の背景にどのような事情があるのかを話し合い、考えることはお互いの国を理解する上で非常に重要であると感じた。</p>	

テーマ1 サブテーマ3 概要	
テーマ	新しい時代の働き方
グループテーマ	外国人材の受け入れ
参加者	日本青年 3名 中国青年 3名
成果	
<p><b>1. 中国の現状</b></p> <p>中国は、2025年までに外国人材を100万人規模で受け入れ、北京や上海などの経済発展地域に集中させている。その方針は、日本の「労働力補完型」とは対照的な「高度人材選抜型」である。科学技術・研究系の専門家を優遇し、高い補助金や簡潔な行政手続き(身分証のカード化など)で誘致している。今後は世界に向けた技術開発のためにアジアのみならず、欧米からの人材を活用する方針だ。</p> <p>しかし、課題も多い。受け入れが中華系人材に偏り、欧米からのハイレベル人材誘致に苦戦している。また、経済水準が低い中西部では、高い給与や保証を提供できず、人材が集中する地域の格差が顕著である。教育支援も不足しており、言葉の壁によるトラブルは日本と同様に発生している。今後は、質を維持しつつ、受け入れのバランスを取ることが重要だと認識されている。</p> <p><b>2. 日本の現状</b></p> <p>日本の外国人労働者数は2024年に230万人を超え、右肩上がりの増加を続けている。国籍別ではベトナム、中国、フィリピンが多く、労働力不足の補完が受け入れの主な目的だ。産業別では製造業(26%)、サービス業(15%)、地域別では東京、愛知、大阪に集中している。</p> <p>最大の課題は、労働環境と支援体制である。外国人を雇用する事業所の62.4%が従業員30人未満の零細企業であり、これらの小規模な現場では、十分な支援リソースが不足している。その結果、以下の問題が深刻化している。①地方での低賃金や劣悪な住居環境。②転職が原則禁止の制度構造に起因するハラスメントや暴力。③業務に必要な日本語サポートの不足による安全性の欠如や業務指示の誤解。これらの問題を改善していくことが重要だ。</p> <p><b>3. 上記現状から学んだこと、気が付いたこと</b></p> <p>ディスカッションを通じて、日本と中国は受け入れ方針が大きく異なるものの、外国人材が直面する課題には共通点があることが明確になった。共通点として、経済的な機会が多い都市部に外国人材(主に東南アジアから)が集中し、地方との格差を生んでいること、そして、共生において言語の壁が課題となっている点を確認された。しかし、この言語の壁に対する対処法は、両国の受け入れ方針を如実に反映して対照的である。日本では、主に人手不足を補う低賃金労働力が中心であるため、外国人労働者は日本語学習にお金をかけられず、ボランティアの無償・無定型な支援に依存せざるを得ない。一方、中国では研究開発といった高賃金・高度人材を優遇するため、都市の日本語教室や家庭教師といった質の高いサービスを受けられる構造となっている。</p> <p>今後、人材獲得の国際的な競争の中で、自国に優秀な外国人材を集めるためには、働く「人」にとって魅力的な環境を整える必要があるという点で認識が一致した。単に賃金を上げるだけでなく、中国が一部で実践する手続きの簡素化や能力主義に基づくビザ政策を導入は、日本にとってヒントとなる。外国人材が能力を発揮できる環境と「ここにいる必要がある」と感じられる帰属感を提供することが必要だ。</p>	

テーマ2 サブテーマ1 概要	
テーマ	文化と伝統
グループテーマ	アイデンティティ
参加者	日本青年 2名 中国青年 3名
成果	
<p><b>1. 中国の現状</b></p> <p>中国側は、情報過多の現代では価値判断が揺らぎ、若者が人生の意味や位置づけを見失いやすいと指摘し、その克服には日記や興味・価値観の可視化などの内省が重要と述べた。また、自分を文化・歴史との関係で相対化することが自己理解を深めるとした。さらに、日本文化が外来文化を取り込みつつ独自に発展してきた点に触れ、文化は固定されず外部刺激で変化すると整理した。異文化の良い部分を取り込みローカライズする「抱擁性」は個人にも国家にも必要とした。</p> <p>また、アイデンティティ構築の方法として、①文化的継承(民族文化を選び取り内面化する)、②革新(技術・社会変化と結びつけ自己を更新する)、③交流による自己発見(他者との関わりを通じて強みや課題を再認識する)の三点が示された。以下の日本側の問いに対しては、個人的・集合的アイデンティティの優劣は単純に決められず、個人の多層性は国家・文化レベルとも不可分であると回答した。また、異なるアイデンティティ同士の関わりでは、複数の「身分」「属性」から共通点を探り、まず個人レベルで接近することが有効と述べた。</p> <p><b>2. 日本の現状</b></p> <p>日本側はまず「アイデンティティとは何か」を共有した。アイデンティティは、自分が何者であるかという感覚で、経験・価値観・社会的役割・文化的背景などから形成される。これには、性格や経験、選択などの個人的アイデンティティと、国籍・文化・言語・所属集団などの集合的アイデンティティの二層があり、相互に影響しながら変化する。その上で、日本の若者が直面する多層的葛藤として、SNSを通じた海外文化との接触による西洋的個人主義の受容と「日本人らしさ」や家族・社会からの期待との間の揺れ、都市と地方の価値観の差異、学校や企業の「和」と個人主義の衝突、ジェンダー観、家族関係などを挙げた。</p> <p>また、中国側への理解を深めるため、日本側は①中国で個人的・集合的アイデンティティのどちらが重視されるのか、②異なるアイデンティティの人々が社会で共生していくためにはどうすべきか、という二点を問いとして提示した。</p> <p><b>3. 上記現状から学んだこと、気が付いたこと</b></p> <p>議論を通じ、日中双方の若者が多層的なアイデンティティを模索している点が確認された。日本側は個人・地域・ジェンダー・家族・SNSなど多様な要素が複合的に影響する点を示し、中国側は価値判断の揺らぎ、文化的継承と革新、情報社会の影響を強調した。違いとして、日本側は個人の内面や細かなレイヤーに焦点を当て、中国側は文化的・社会的背景を重視する傾向が見られた。一方で共通点として、アイデンティティは交流・経験・環境変化で絶えず更新される動的プロセスであるという理解が共有された。また、SNS時代の困難や、多様なアイデンティティを持つ人々の共生の課題は両国共通であり、個人レベルの接点と集合的レベルのつながりを両立させる重要性が確認された。</p>	

テーマ2 サブテーマ2 概要	
テーマ	文化と伝統
グループテーマ	伝統的価値観 「結婚観」
参加者	日本青年 3名 中国青年 3名
成果	
<p><b>1. 中国の現状</b></p> <p>中国では、かつては日本と同様にお見合い結婚が主流であった。結婚相手に求められる条件として、男性には「高・富・帥」(高身長・お金持ち・カッコ良さ)、女性には「白・富・美」(肌白・お金持ち・美人)が理想とされ、女性は子を産み家系を継ぐ存在という意味の「伝宗接代」という考えも根強かった。</p> <p>現在の中国では自由恋愛が広がっている一方で、親の勧めなどによるお見合い結婚も一定数存在する。また、中国の若者はお見合い結婚に対して必ずしも否定的ではなく、強い拒否感を示さない傾向があることも明らかになった。</p> <p><b>2. 日本の現状</b></p> <p>かつて日本では、男性は外で働き、女性は家庭を担うという性別役割分担が強く意識されていた。女性には「良妻賢母」の資質が求められ、恋愛結婚よりもお見合い結婚が一般的であった。</p> <p>また、結婚相手に求める条件としては、過去には「三高(高身長・高収入・高学歴)」がもてはやされ、その後「三平(平均的収入・平凡な外見・平穏な性格)」、「三低(低姿勢・低依存・低リスク)」といった指標も登場した。</p> <p>現在では、結婚相手に求める条件は「YSK(優しさ・自然体でいられる・価値観の一致)」が重視され、自由恋愛が主流となっている。</p> <p><b>3. 上記現状から学んだこと、気が付いたこと</b></p> <p>以上の現状から、日本と中国には、歴史的に類似した結婚観が存在し、結婚相手に求める条件を表す語彙が共通して発展してきたことが確認できる。</p> <p>一方、相違点として、日本の若者が現在お見合い結婚を避ける傾向にあるのに対し、中国の若者は比較的受容的であり、現在でもお見合い結婚が一定程度支持されている点が指摘できる。</p> <p>両国の青年同士で率直に意見を交わしたことで、同じアジア文化圏に属するという共通基盤を確認した一方、社会構造や家族観の変化の速度や方向性は必ずしも一致しない現実を肌で感じた。こうした差異は、文化や価値観が単に地域的共通性だけで決まるのではなく、各国固有の歴史的背景、世代意識の違いによって形成されていることを実感した。</p>	

テーマ2 サブテーマ3 概要	
テーマ	文化と伝統
グループテーマ	伝統芸術
参加者	日本青年 2名 中国青年 3名
成果	
<p><b>1. 中国の現状</b></p> <p>中山服を着用して参加した中国青年もおり、実際に紹介をもらった。主に伝統衣装について議論した中山服は孫文が着用していたことで広く知られているが、現在は羽織物風にアレンジされ、若者にも浸透しつつあるとの説明があった。中国では多くの場合、旅行など着飾りたい日に伝統衣装を身に着け、写真や動画を記録する目的で着用することが一般的であると紹介された。また、漢民族は歴史上さまざまな民族が同化して形成されてきた経緯があり、その過程で日常的な伝統衣装の着用機会が減少したのではないかという見解も示された。</p> <p>一方、全国人民代表大会では55の少数民族が民族衣装をまとい、公的な舞台上で文化を表現している。欧州由来のスーツを公式の場で着用することについて意見を求めたところ、スーツは利便性と汎用性の面で優れており、現代社会に適しているとの回答が多かった。民族衣装に対する愛着はあるものの、日常的に着用するには心理的・実務的なハードルが高く、広く普及するには時間を要するとの認識が共有されていた。民族衣装は着たい気持ちはあるが、ハードルが高く、一般的になるのは時間がかかるだろうと言われた。</p> <p><b>2. 日本の現状</b></p> <p>主に歌舞伎、書道、和服の三点を中心に進められた。第一に、歌舞伎についてである。近年、映画「国宝」のヒットを契機として若い世代の関心が高まり、実際に歌舞伎を鑑賞する人が増えている。しかし、歌舞伎は独特の節回しや難解な台詞が多く、一度の鑑賞で内容を把握することは容易ではないため、一定の教養や予備知識が求められるという指摘もあった。近年は「ワンピース歌舞伎」など現代的な題材を取り入れ、入門者でも楽しめる公演が増えつつあり、伝統と革新の両立が図られている。</p> <p>第二に、書道である。現代の日本では、音楽に合わせて大きな紙に大筆で書く書道パフォーマンスが広く普及し、若者にも親しまれている。柔らかな線の特徴とする日本独自のかな文字文化とは異なる、視覚的で動きのある表現形態として注目されている。</p> <p>第三に、和服についてである。現代日本では日常着としての利用は限定的であるものの、冠婚葬祭、季節行事、卒業式など、いわゆるハレの日に着用される文化が根強く残っている。以上から、日本の伝統芸術は古典を重視しつつも現代的なアレンジや新たな表現を取り入れ、次世代へ継承されている。</p> <p><b>3. 上記現状から学んだこと、気が付いたこと</b></p> <p>今回の討議を通じ、日中双方の伝統芸術には共通して「現代に適応する工夫」が求められていることに気付かされた。文化が継承され続けるためには生命力が必要であり、その生命力は時代に合わせた表現や利用の仕方によって支えられていると考えられる。日本では歌舞伎が現代作品と融合し、若い世代の関心を呼び込んでいる。また書道もパフォーマンスとして発展し、視覚的な魅力を高めることで新しい鑑賞者層を獲得している。一方で古典的要素を大切にしている点も特徴であり、伝統と革新が両立していることが理解できた。</p> <p>伝統衣装については、両国の着用状況に明確な違いが見られた。日本では和服が冠婚葬祭や季節行事といった特別な日の装いとして位置づけられ、儀礼性が強い。一方、中国では漢服やアレンジされた中山服などを、旅行や写真撮影など「着飾って楽しむ」目的で日常的に取り入れる場面が多い。これには着付けの難易度も影響していると考えられる。日本の着物は自装が難しく専門知識を要するため、特別な日に限られがちであるのに対し、中国の伝統衣装は比較的自装しやすく、現代的に改良されたことでよりカジュアルに浸透しているのではないかと。以上から、伝統芸術が人々の生活に根づくためには、現代の感性に合わせた工夫と、気軽に触れられる環境づくりが不可欠であると考えた。</p>	

## 中国プログラムディスカッション全体概要

日 時	令和7年11月10日
場 所	浙江省 浙江工商大学下沙キャンパス青年の家
テ ー マ	遣唐使からZ世代へ
参 加 者	日本青年15名 中国青年18名
スケジュール	9:25～ 9:50 オープンパフォーマンス、挨拶 9:50～10:40 基調講演 (1)「中日文化交流の歴史と未来」 (江静 浙江工商大学東方言語と哲学学院・東と日文明鑑賞研究院院長) (2)「正を守り、新を創り、千年歴史の湖筆の温度を呼び覚ます」 (姚玉粼 浙江省青連委員、湖州真鹿湖筆有限公司総経理) 10:40～11:05 パフォーマンス 11:05～11:40 グループディスカッション 11:40～12:05 発表



## ディスカッショングループ別成果

グループ 1 概要	
テーマ	遣唐使から Z 世代へ
グループテーマ	日本・中国の青年が自国に持ち帰りたいもの
参加者	日本青年 3名 中国青年 3名
成果	
<p><b>1. 中国の現状</b></p> <p>中国青年からは、日本の社会や文化に根付く「物事に対する繊細さ」や「清潔さ」を自国に持ち帰りたいという意見が挙げられた。特に、製品やサービスの質に見られる「細部へのこだわり」は、日本独自の美意識として高く評価された。また、公共の場における秩序ある振る舞いの根底にある「他人に対する敬意」や配慮の精神については、調和のとれた社会生活を営む上で学ぶべき重要なマインドセットであるとの認識で一致した。</p>	
<p><b>2. 日本の現状</b></p> <p>日本青年からは、滞在中に肌で感じた「温かく盛大なおもてなしの精神」と、社会全体に溢れる「チャレンジ精神」を持ち帰りたいという意見が出された。特に、失敗を恐れずに積極的に新しい分野に投資をし、失敗をしても挑戦し続けるというマインドは、時に現状維持や過度な調和を求めがちな日本社会に必要な要素になりうると議論された。全体を通じて、中国社会のダイナミックな変化と、それを支える人々のエネルギーが強調された。</p>	
<p><b>3. 上記現状から学んだこと、気が付いたこと</b></p> <p>本ディスカッションを通じて、日本が持つ「調和と繊細さ」と、中国が持つ「挑戦力とエネルギー」という、それぞれの強みと特徴が浮き彫りになった。「細部へのこだわり」と「大胆な挑戦心」は、相反するものではなく、互いに取り入れることでより良い社会を築ける補完関係にもなりうる。私たち Z 世代が、互いの国が持つ特徴を交換し合い、共に未来を創造していくことの重要性を再認識する機会となった。</p>	

グループ2 概要	
テーマ	遣唐使からZ世代へ
グループテーマ	日本・中国の青年が自国に持ち帰りたいもの
参加者	日本青年 2名 中国青年 3名
成果	
<p><b>1. 中国の現状</b></p> <p>中国青年からは日本のトイレの設備・技術を持ち帰りたいという意見があった。蓋の自動開閉、便座の保温機能などの設備の充実度に加え、清潔さやバリアフリーへの対応が高く評価されていた。</p> <p><b>2. 日本の現状</b></p> <p>日本青年からは、中国から持ち帰りたいものとして以下の3点が挙げられた。</p> <p>一つ目は、顔認証システムである。AI技術やデジタル化が進む中国では、大学のキャンパスに入る際にも顔認証システムが使用されていた。IDカードを提示する必要がないという物理的な利便性に加え、顔認証システムにより大学への出入りを管理しており、セキュリティ面においても優れている点が共有された。</p> <p>二つ目は、キャッシュレス文化である。中国では、買い物だけでなく、地下鉄の乗車においてもキャッシュレスが進んでおり、現金払いがまだ残っている日本とは異なっていた。また、決済に使用するアプリは、決済機能だけでなく、チャット機能やID登録の機能も備えており、そのアプリさえあれば、現金やIDカードを持ち歩く必要がない点も優れている。日本で一般的に使用されるコミュニケーションアプリにも決済機能はあるが、大多数の人はチャット機能のみを利用しており、この点で中国のアプリとは異なっている。</p> <p>三つ目は、設備や制度を導入するスピード感である。キャッシュレス化を例に挙げると、日本はキャッシュレスにかかる設備の準備や検証、現金利用者への配慮などにより、キャッシュレス化のスピードは緩やかであると考えられる。一方、中国は「まず導入してみる」という姿勢が見られ、キャッシュレス化がその好事例である。このように、日本は慎重な検証と議論を重ねるため、導入までに時間がかかる一方で、中国は行政や企業の意思決定が早く、社会の受容度も高いことから、新技術や制度の導入スピードが非常に速い印象である。それぞれに良さがあると思うが、中国の発展の速さは日本に持ち帰りたい要素だと感じた。</p> <p><b>3. 上記現状から学んだこと、気が付いたこと</b></p> <p>ディスカッションを通じて、日本と中国は異なるアプローチで社会や技術を発展させてきた一方で、互いに学び合える点が多いことに気付いた。中国のスピード感や日本の丁寧な検証文化など、対照的ともいえる特徴は、両国が大切にしてきた価値観の表れであり、日本の特性を客観的に捉え直すきっかけにもなった。また、ディスカッションでは、日中の文化交流についても議論し、私たち若い世代が対面での交流やデジタルプラットフォームを活用して様々な分野で文化交流を促進することが、両国の歩み寄りや理解につながると感じた。</p>	

グループ3 概要	
テーマ	遣唐使から Z 世代へ
グループテーマ	日本・中国の青年が自国に持ち帰りたいもの
参加者	日本青年 3名 中国青年 3名
成果	
<p><b>1. 中国の現状</b></p> <p>中国側からは、日本の社会課題を解決し、国民生活を豊かにするためのデジタル技術と伝統的な健康法が話題に上がった。</p> <p>最も日本に導入すべきだとされたのは、行政手続きを全て完結できる統合型アプリである。不動産購入、結婚手続き、保険、企業へのエントリーといった「生まれてから死ぬまで」の手続きを一つのデジタルプラットフォーム上で完了させるシステムは、人口が多い中国で役所に行く手間を大幅に削減している。行政サービスにかかる時間とコストを抜本的に改善できるため、日本の行政効率化のヒントとなるだろう。</p> <p>次に、音声認識による人物特定技術が世界トップレベルである点も注目された。顔認証や指紋認証に加え、音声の技術を防犯などの分野に活用することで、日本のセキュリティ対策を強化できると考える。</p> <p>さらに、健康維持とリフレッシュのための太極拳が挙げられた。中国では朝晩を問わず公園などで多くの人が太極拳を行っており、これが心身の健康維持や手術後のリハビリに役立っている。</p> <p><b>2. 日本の現状</b></p> <p>日本側からは、国民の防災の意識の高さと災害対策の技術を中国に共有すべきであると提案された。日中ともに自然災害が多いものの、特に災害の多い日本は、国民の防災意識が非常に高いという強みがある。例えば、日本では毎年9月1日を「防災の日」と定め、家族間で避難場所の確認や災害用バッグの点検を行う良い機会となっている。また、幼稚園から大学まで毎年防災訓練が徹底して実施されており、災害時でも混乱が少ない状態で対応できるように訓練されている。</p> <p>さらに、耐震技術も外国に共有すべき誇れるものだ。特に都市部の高層ビルでは、地震が発生した際に緊急地震速報と連動し、エレベーターが最寄りの階で自動停止する技術が高度に発達している。</p> <p><b>3. 上記現状から学んだこと、気が付いたこと</b></p> <p>ディスカッションを通じ、中国のデジタル技術と伝統的な健康法、日本の災害対策における技術と国民意識という、それぞれの国が誇る強みを共有できたことで、改めてその価値の大きさに気付くことができた。</p> <p>日本と中国の文化交流は、遣唐使の時代、あるいはそれ以前から始まった歴史がある。現代においても、今回の対面での交流を通して、私たちは互いの強みを学び、自国の課題解決へのヒントを得ることができた。今後もこのような対面のコミュニケーションを通して、文化交流を積極的に継続し、相互理解を深めていく必要性を強く感じた。</p>	

グループ4 概要	
テーマ	遣唐使からZ世代へ
グループテーマ	日本・中国の青年が自国に持ち帰りたいもの
参加者	日本青年 2名 中国青年 3名
成果	
<p><b>1. 中国の現状</b></p> <p>中国側は、日本との交流を通して強く印象に残った点として、日本社会の「緻密さ」と「深さ」を挙げた。日本では事柄が体系的かつ秩序立てて進められ、予期せぬ事態への対応プロセスも成熟していることに感銘を受けたと述べた。また、日本の若者が何事にも深く考え抜き、徹底や完璧を追求する姿勢は、今日の高度に整備された都市や技術発展を支えてきた基盤であると評価した。</p> <p>一方で、中国側はこの完璧主義がときに意思決定や実行力の低下につながる側面についても言及した。特に新技術の導入において十分に検証されていない段階では動きが慎重になることが、機会を逃す可能性にもつながり得るという認識を示した。対照的に中国は急速な発展の中で、変化する環境に合わせて問題を解決し、不確実性の中でも迅速に決断を下す必要があると説明した。外貨(デリバリー)、ネット通販、配車サービス、電子決済など、生活に密着した「便利さ」の背景には、社会全体の高い実行力と柔軟な対応力があると述べた。また、中国側は、どの国の発展モデルにも固有の土壌があり、日本の緻密さは品質と信頼を、中国の俊敏さは効率と利便性を生み出してきたと整理した。</p> <p><b>2. 日本の現状</b></p> <p>日本側は、中国から日本が学び得る重要な価値として「スピード」と「決断力」を挙げた。特にAI分野における中国の取組は顕著であり、深圳では不完全なプロトタイプであってもまず市場に投入し、ユーザーの反応を踏まえて高速に改善していく文化が根付いている。この「スモールスタート、ファストイテレーション」という姿勢により、理論構築から社会実装までのサイクルが極めて短期間で実現されていると指摘した。</p> <p>また、このスピード感と決断力はAI以外の分野でも現れており、日本側は上海から杭州に移動する際に高速道路や集合住宅が急速に建設されている様子を目の当たりにしたことに言及し、こうした迅速な実行力が中国の国際競争力の源泉であるとの見解を示した。一方で、日本には品質への高いこだわりや緻密な計画性という強みがあるものの、同時に「完璧主義」や「前例主義」が意思決定の遅さにつながっているという課題意識も共有した。特に急速に発展するAI分野において、慎重さが機会損失を生む可能性があるとして指摘し、日本がこれからの時代に適応するためには、従来の習慣やプロセスの中で見直し可能な部分を探る必要があると述べた。</p> <p><b>3. 上記現状から学んだこと、気が付いたこと</b></p> <p>今回のディスカッションを通じ、日本と中国の若者が互いの社会や文化に対して異なる強みと課題を認識しつつ、それらを補完し合う可能性を確認した。日本側は中国の「スピード」と「決断力」から学ぶ必要性を指摘し、迅速な実行と大胆な挑戦が現代の技術競争力の鍵であると捉えた。一方、中国側は日本の「緻密さ」と「深さ」を高く評価し、体系性や品質を重視する姿勢が持続的な発展を支えてきたと理解した。</p> <p>両国の違いとしては、日本が慎重さや完璧性を重視し、十分な検証と計画性を前提とする傾向が強いのに対し、中国は変化の中で試行錯誤を繰り返しながら前進する俊敏さと柔軟性を発揮している点が挙げられる。しかし、どちらの姿勢にも固有の強みがあり、単純に優劣をつけることはできない。一方で共通するのは、固定された発展モデルを採るのではなく、環境に応じて最適解を導き出すという動的な姿勢の重要性を共有した点である。</p>	

グループ5概要	
テーマ	遣唐使からZ世代へ
グループテーマ	日本・中国の青年が自国に持ち帰りたいもの
参加者	日本青年 3名 中国青年 3名
成果	
<p><b>1. 中国の現状</b></p> <p>初日のホテル到着時、荷物を運んでくれたり、夕食の際には料理を取り分けてくれたりするなど、中国青年が行動で示す歓迎の姿勢は日本青年にとって、非常に印象的だった。こうした行動は単なる親切心だけではなく、「自分の好きなものや価値あるものを大切な相手と共有したい」という文化的価値観に基づくものである。中国には古くから「仁・義・礼」といった人と人の関係を重視する価値観があり、それが現代の若者の行動にも反映されていると考えた。</p> <p><b>2. 日本の現状</b></p> <p>日本の「おもてなし文化」は、相手に負担をかけず、事前の準備や細やかな気遣いを重視する形式が特徴である。また、日本文化における茶道・華道・書道などの「道」は、形式的な美しさだけでなく、整然とした手順や秩序を重んじる日本人的な文化的フレームワークが反映されている。</p> <p>現代の情報爆発や選択肢の多さにより不安を抱きやすいAI時代においても、日本文化のこうした秩序や計画性は、安心感や安定感を提供する生活様式として、中国の若者に受け入れられているようだ。</p> <p><b>3. 上記現状から学んだこと、気が付いたこと</b></p> <p>今回のディスカッションで最も学んだことは、同じアジア文化圏でありながら、人と人のつながり方には大きな違いがあるという点である。中国では積極的に関わり、行動で歓迎や親しみを示す文化があり、日本では控えめで丁寧な距離感を重視する文化がある。この対照的なアプローチは、遣唐使以来続く長い日中交流の歴史を現代に引き継ぐものであり、両国の文化的背景や価値観を理解する上で重要な手がかりとなるだろう。</p> <p>今回の経験を通じて、私たちはZ世代として、異文化理解の重要性を再認識した。相手の文化や価値観を尊重しつつ、自らの強みを活かすことで、より豊かで柔軟な人間関係を築くことができるはずだ。また、遣唐使の時代から続く日中の交流の歴史を現代に引き継ぎ、Z世代として新たな形で国際交流を発展させる可能性も見えてきた。これからの社会において、文化的違いを学び合い、共通の価値を見出す姿勢はますます重要になると考えた。</p>	

グループ6概要	
テーマ	遣唐使からZ世代へ
グループテーマ	日本・中国の青年が自国に持ち帰りたいもの
参加者	日本青年 2名 中国青年 3名
成果	
<p><b>1. 中国の現状</b></p> <p>中国青年は、日本の「人を中心に据える理念」を学びたいと考えていた。具体的に以下に4点挙げる。第一に、思いやりの姿勢である。日本社会に見られる他者への配慮や、状況に応じて静かに行動する態度は、円滑な人間関係を支える重要な姿勢として評価された。第二に、質の高いサービスである。店舗や公共施設における丁寧な対応や、一貫した接客態度は信頼感を生み、学ぶべき点が多いと述べられた。第三に、トイレの清潔さである。衛生管理の徹底は快適さを提供するだけでなく、利用者全体の意識向上にも寄与していると指摘された。第四に、お辞儀を通じて感謝や敬意を表す文化である。非言語的ながら明確な意思を示す手段として、相互理解を深める上で有効と受け止められた。</p> <p><b>2. 日本の現状</b></p> <p>日本青年は、中国の社会インフラ、生活様式、技術応用、特に中国の都市機能の発展を学びたいと考えていた。第一に、シェアサイクルの利便性である。街中で気軽に借りられ、目的地付近で返却できる仕組みは移動の自由度を高め、公共交通を補完する有効な手段として注目された。第二に、ドローンを活用した配送に積極的に取り組む姿勢である。新しい技術を導入するために環境整備を進める姿勢は、挑戦を恐れない心意気として評価された。第三に、デリバリーサービスの充実である。日常的に利用可能で、幅広い店舗が参加し、注文から受け取りまでが迅速である点は、生活の利便性を大きく高めていると指摘された。第四に、主要な決済方法が実質的に二つに集約されている点だ。スマホ一つでどこでも決済可能で利便性が高い。現金、クレジットカード、QRコード決済、電子マネーなど決済方法が多岐にわたる日本とは対照的だ。</p> <p><b>3. 上記現状から学んだこと、気が付いたこと</b></p> <p>中国青年は、日本の人を中心に据える姿勢が社会全体に浸透し、日常の行動やサービスを支えているという点を評価した。思いやりを重視する態度、丁寧で質の高い接遇、環境の清潔さ、礼をもって意思を示す習慣はいずれも相手を尊重する文化の積み重ねであり、社会の安定や信頼感を支える基盤である。</p> <p>一方、日本青年は、中国の都市や生活を支える仕組みが、技術の活用と効率化を中心に大胆に構築されていることに気付いた。シェアサイクルやデリバリーの広範な普及、ドローン配送への挑戦、決済方法の統一などは、利便性の向上を重視し、社会全体で新しい仕組みを迅速に受け入れる姿勢の表れである。相互の特徴を比較することで、両国は「人を中心とする発想」と「技術を積極的に取り入れる発想」の双方に学ぶ余地があるという結論になった。</p>	

# 事業アンケート

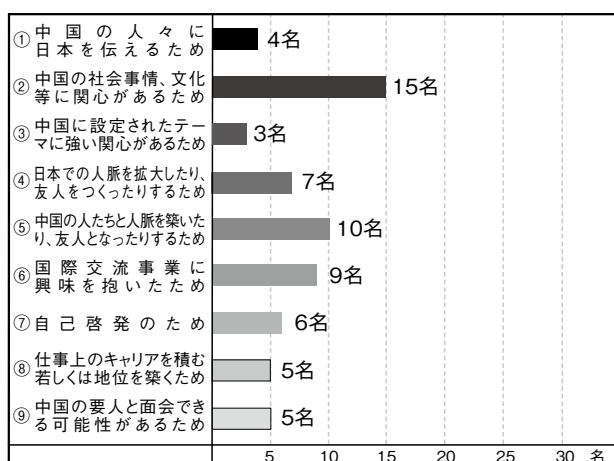
## I 日本参加青年アンケート

アンケート対象者：団長、副団長、渉外を除く日本参加青年15名

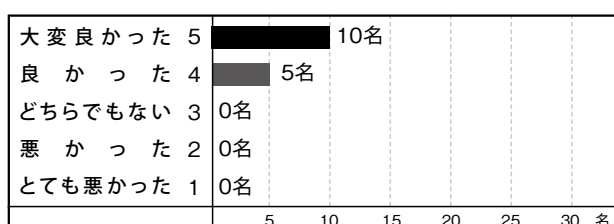
### 1. 全体評価

#### (1) あなたは、なぜこの事業に参加したのですか。

(複数回答可)



#### (2) 事業全体をどのように総合評価しますか。

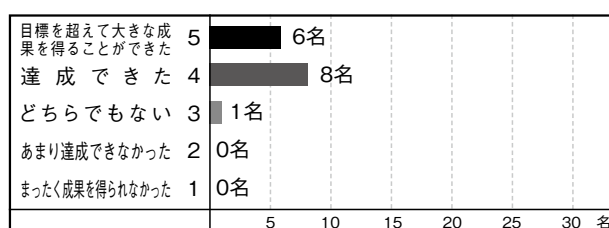


- ・中国青年との交流や文化体験を通して、中国についての理解を深められただけでなく、日本の文化や価値観について再認識することができた。また、国際交流においてお互いを尊敬し合い、積極的に相手を理解しようとする姿勢の大切さを改めて感じた。充実したプログラムであった。
- ・「新しい時代の働き方」と「文化と伝統」にまつわる施設訪問やディスカッションを行い両国の課題や青年の考えについて知ることができたため大変良かった。また、初めての中国訪問であり、今後も連絡をとり交流していきたいと思える友人に出会えたことも大変良かった。
- ・以前から国際交流活動に関心があり、自身の大学や地域においてもそのような活動に従事していた。しかし、今事業は一般的な国際交流活動のみに留まらず、表敬訪問や中国青年との密な交流等を通じて、多角的な面から中国を捉えることができた。その中でも特に中国青年との交流は文化や価値観を超えた

青年同士の率直な意見交換の場に繋がった。このような体験は他事業にはない、内閣府主催だからこそ体験できる活動だと強く感じた。

- ・事業全体を通して、学んだことが多くあり、総合的に良かったと感じる。一方で5日間という各所の滞在期間は短いように感じたため、4の評価にした。

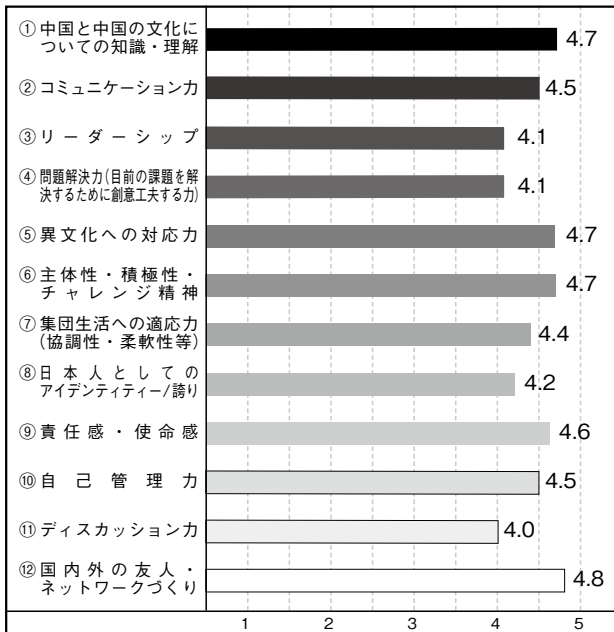
#### (3) この事業に参加するにあたって、あなたの目標は何でしたか。また、その目標は達成できましたか。



- ・一生、日中関係や国際情勢について語り合える日中の知己を得ること。
- ・中国について自分の目で見、考えること。中国の視点から日本を見ること。日中青年と仲を深めること。
- ・日本代表青年として自分で考え行動し、多様な視点から日本と中国への理解を深めること。
- ・中国青年が日本・中国の事を率直にどう感じているのかを学び、自身の中国への関心を広げること。
- ・同世代の中国の友人が世界をどのように見ているのかを理解すること。

(4) 以下の①～⑪までに掲げる項目に関し、この事業全体を通じて得られた自らの成長等への効果について、以下の5～1のうち、該当すると思われるものを選択してください。

5：大きな効果があった／4：効果があった／  
3：どちらでもない／2：あまり効果がなかった／  
1：効果がなかった

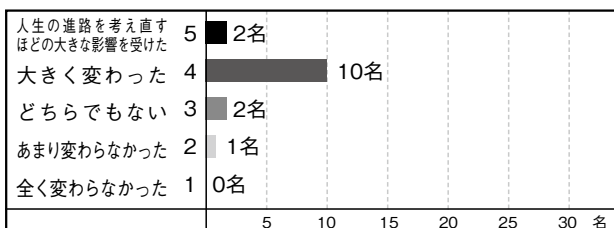


※数値は参加青年15名の平均

(5) 上記(4)に掲げたもの以外で、事業参加によって具体的に得られたものがあれば記入してください。

- ・中国、そして国際社会というフィールドに踏み出す自信や勇氣。
- ・タイトなスケジュールを完遂するための体力・精神力。
- ・「中国人」、「日本人」という括りが強調されがちな日々の中でも、個人としての差が大きいという当たり前のことを実感し、多面的に人を見ることの重要性を認識できた。

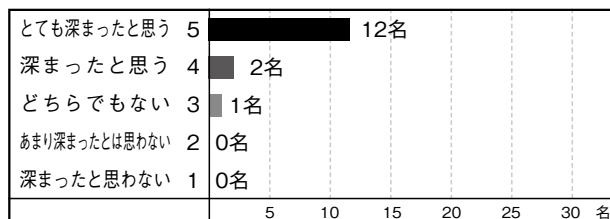
(6) あなたはこの事業への参加を通じて、人生、社会などについての考え方が変わったと思いますか。



- ・中国社会への理解が深まったとともに、私が想像してきた中国の姿と実際の姿の差異から中国への真の意味での解像度が上がった。

- ・これまで中国へのイメージは、メディアや他人からの話で形成されたものであったが、今回のプログラムで実体験を通して大きく変わった。異文化について、自分の目で見えて相手を理解し尊敬するという姿勢を身につけることができた。
- ・新しい時代の働き方を学ぶために複数の企業や関連施設を訪問したことで、「デジタルノマド」という場所や形式にとらわれない新しい働き方を知り、進路への視野が広がった。日本と中国をつなぐような仕事をしたいと改めて強く感じた。
- ・自分は卒業後すぐに働く予定だが、中国青年は大学院に進む学生が多いと聞き、そのような道もあるということを変更して考えさせられた。来年留学に行くことを改めて決意した。
- ・外交官になりたいという目標を持っていたが、何のために外交官となり何を達成していきたいのかを考えるという点で大きな影響を受けた。事業に参加する前までは、外交官としての目標は日本を中心に考えていたが、中国青年たちとの交流を通じて得た経験から、こうした「二国間」の青年交流の重要性を改めて感じた。

(7) この事業を通じて、あなたと中国の人々との相互理解が深まったと思いますか。

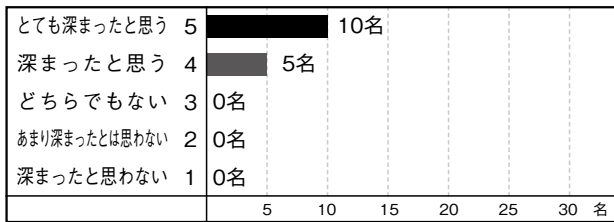


- ・深まったと思う。日本のメディアを通して無意識のうちに醸成されたイメージと大きな違いがあると感じた。また、今後の国際問題を考える上で、その国について考えた時に頭に思い浮かぶ友人がいるかどうかは重要だと感じた。
- ・今回の交流では対面でのディスカッションや会話が多く行われたため、メディアやインターネットでは得ることができない率直な意見交換ができ、相互理解が深まった。
- ・ディスカッションや移動中の交流などを通じて、お互いの国の印象や価値観、文化などを語り合った。また、両国のおもてなし文化や時間に対する認識などの違いに気づいた。今回の交流から、日本と中国には文化の違いはあるものの、根底にある相手を思いやる気持ちは同じなのではないかと考えた。
- ・プログラムだけでなく、プログラム外でも互いの国の文化や大学のことなどを語り合ったことで、国は違えど共通点も見つけられた。文化の違いで戸惑うこともあったが、新しい気づきを得られたこと、中

国の青年たちが私たちの話を聞いて驚いていた場面もあった。

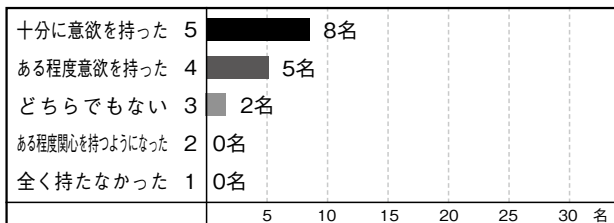
- もともと中国に対して、ポジティブな印象はあまり持っていなかったが、今回中国青年たちと交流をし、青年同士では何も垣根がないと感じた。中国のことを派遣前よりもフラットな視点で捉えられるようになった。

**(8) この事業を通じて、あなたと中国の人々との友好が深まったと思いますか。**



- 同じ青年たちと10日間という時間を過ごしたことで、たくさん話をする機会があり、友好は深まったと感じる。一方で言語の壁は確かに存在し、交流中に壁となる場面があった。
- 政治的には良好な関係でないとしても、個人間でのコミュニケーションは円滑に取れる。その積み重ねで日中友好が続くと思う。
- プログラム中も、プログラム外の自由時間も、長い時間を共に過ごし、学校や家族、趣味の話など日本人の友人と変わらない会話をし、友好が深まった。これからも連絡を取り合い、再会したいと思っている。
- 10日間共に生活した中で、様々なことを語り、想いを共有でき、深い友情が生まれたと感じている。中国最終日のお別れの時には、涙を流しながら抱き合い再会を約束した。このご縁を大切にし、一生の友人として今後も交流していきたい。

**(9) 事業参加を通じて、社会貢献活動を始めたい、参加したいという意欲等を持ちましたか。**

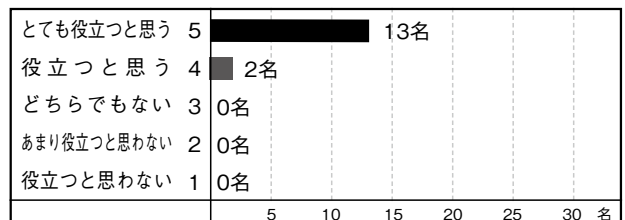


- この事業は多くの方の協力によって成り立っていることを知ったので、今後は支える立場になり、今後も社会貢献をしていきたい。
- 日本のメディアが報道している中国のイメージと実際の中国の姿の違いを周囲に伝えていきたい。また、実際に中国に行くことによるのみ感じられる中国の雰囲気等もあると思うので、どうしたら日本人が

中国へ渡航したくなるか、中国への理解が深まるかについても今後模索していきたい。

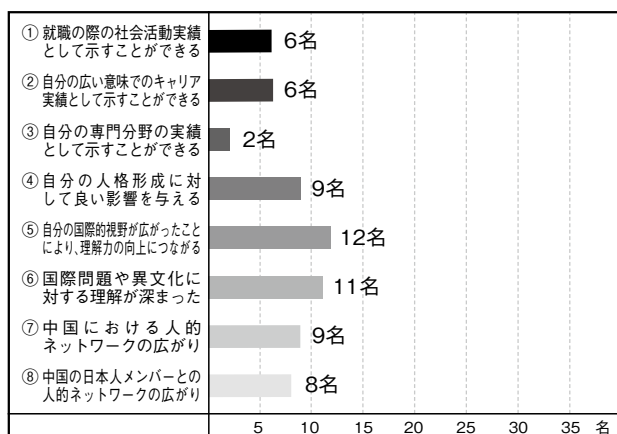
- 今回の事業に参加し、多くの人（運営の皆様や職場、家族など）のおかげで、非常に特別で貴重な機会となった。この機会で得られた学びは社会に還元する必要があると素直に感じる。中国の青年と本音で話し合えたことで、我々と同じく中国の青年も日中友好を望んでいるということが実感できた。この体験は今後の私の人生の選択において強力な後押しとなると考える。
- 今まで私は交流プログラム等に参加してばかりだったが、今後は自分がその場を作っていく、日中の青年の対話を深めていきたいという目標が生まれた。

**(10) - 1 この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか。**



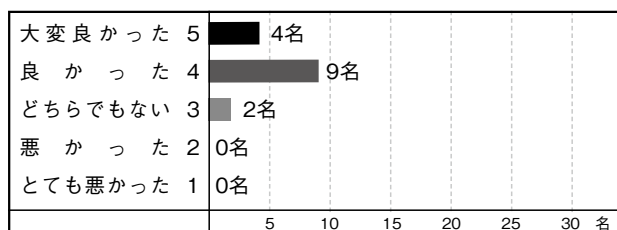
- 様々なバックグラウンドを持ち、異なる分野で活躍している日本と中国の青年に出会うことができ、多くの刺激をいただいた。この事業で学んだことやプログラムを通して深く考えたことを今後の人生の糧にしたい。
- この事業を通して、将来に最も役立つと思ったことは日本・中国青年との関係である。双方の国で計10日間の充実したプログラムを通して得た深い友情を今後とも大切にし、中国に携わる仕事や活動をする際は事業で出会った仲間の顔を思い浮かべながら日中友好の架け橋のような存在になりたい。
- 互いに大人になっていく中で、日中両国の青年は皆社会における影響力や実力が高まっていくものと感じている。その際に力を合わせて親善交流だけでなく仕事でも新しい価値を発揮できるのではないかと考える。
- 中国から距離を置こうと考えた高校二年生の自分と、本事業を終えた大学一年生の自分は、中国をどう見るのか、中国とどう関わっていききたいのかという点で全く異なっている。将来は中国と深く関わる仕事に就き、発展を続ける中国との深い繋がりから学んでいきたいという思いで溢れている。

(10) -2 上記において、5～4を選んだ方は、どのように役立つと考えるか、以下の内容から当てはまる項目を選んでください。(複数回答可)



## 2. 日本プログラム（東京プログラム・埼玉プログラム）について

(1) 日本プログラム全体をどのように評価しますか。



- ・「新しい時代の働き方」と「文化と伝統」というテーマに即した施設を視察し、日本の新たな一面を知ることができた。特に、埼玉県でのプログラムは新鮮だった。
- ・中国青年と、日本の文化や伝統、新しい働き方などを共有しあってディスカッションができたことが印象に残っている。
- ・非常に充実した時間であり、日本人としても日本の魅力を感じることができた。
- ・様々な方のご協力により、農業や企業訪問、表敬訪問等の幅広い視点から日本を捉えることのできる大変充実したプログラムであった。
- ・2社の企業訪問は、今回のテーマである新しい時代の働き方と非常にマッチしていて、ディスカッション時にも話題に上がった。知らないことが多く、とても勉強になった。芋掘り体験は、中国でも似た活動があったため、どちらか一方で良いと思った。

(2) 日本プログラムから得たこと、発見したことは何ですか。

- ・文化の違いを肌で感じた。特に、時間の感覚や金銭感覚の違いに驚いた。また、日本について関心のある部分というのが、日本人には想像もできないような

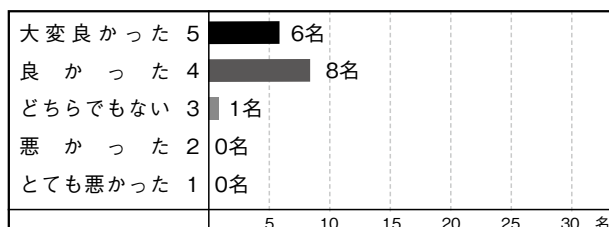
部分である場合が多く、視野が広がったと感じた。

- ・企業訪問では、自分が知らない業界、手厚い福利厚生を実際に見ることができ、テーマの新しい時代の働き方について知識を深めることができた。川越散策では、昔からの伝統と新たな文化をどちらも体感できた。
- ・中国の方が日本の様々な姿を見て、どのような反応をしているかを見られたのは良かった。特に農作業体験では、珍しそうに非常に楽しんでいる様子が印象的だった。
- ・中国青年との会話の中で、日本人のマナーの良さや街のきれいさ、日程の正確さなど、日本の良いところを発見できた。
- ・中国側とのディスカッション方法の違いには衝撃を受けた。先方は事前に準備した原稿を次々に発表する形で、特にその中に現在の中国のアピールも多分に含まれており、中国に対するイメージ形成の一助になった。

(3) 日本プログラム中、最も印象に残ったのはどのようなことですか。

- ・初日の東京体験プログラム。自分たちで計画を立てることで日本のことを再度見直すきっかけとなった。中国青年をアテンドすることは簡単ではなかったが、その苦労もまた自身の成長につながったと感じる。
- ・ディスカッションにおいて、日本の現状に対して中国側から率直な疑問や意見を聞くことができたこと。
- ・ディスカッション。時間ももっとほしいと思うほど盛り上がった。中国の現状についても国としての見解、中国青年の個人の感覚や意見、どちらも聞くことができて、非常に勉強になり、とても考えさせられた。
- ・川越市内散策が最も印象に残った。短い時間の中でも、青年同士で交流しながら伝統的な街並みを散策し、日本文化を肌で感じるすることができた。

(4) 埼玉プログラムでの地元青年との交流をどのように評価しますか。



- ・芋掘り体験などで密に交流することができ、関係を深めることができたとともに、中国青年に埼玉のような地方も体験してもらえたのではないかと思う。
- ・事前に準備をしてくださり、移動などのサポートがと

でも助かった。中国青年も交流ができて非常に楽しそうだった。

- ・埼玉プログラムでの地元青年の方々はフレンドリーな方が多く、非常に接しやすかった。また、入念な事前準備をして下さり大変ありがたかった。
- ・他の内閣府青年国際交流事業に参加した青年の思いを聞くことができ、刺激を受けた他、自分たちの交流で得た学びを共有することができ、相互に非常に有意義であったと思う。

(5) - 1 テーマ別視察先訪問をどのように評価しますか。

大変良かった	5	6名						
良かった	4	7名						
どちらでもない	3	2名						
悪かった	2	0名						
とても悪かった	1	0名						
			5	10	15	20	25	30名

(5) - 2 特に印象に残った訪問先を、印象が強い順に3つ挙げてください。

<株式会社パソナJOB HUB>

- ・新しい時代の働き方について、実際に行われている事業を社員の方から直接聞くことができ、働き方に関する知識を増やすことができた。
- ・新しい時代の働き方の紹介にまさにぴったりな企業だと思われる。会社の福利厚生面で学びになると述べていた中国青年が複数いた。
- ・テーマに沿った内容で、中国青年にとっても印象に残る体験だったと思う。一方で説明が若干長いと思ったので、もう少しオフィス見学や体験型の施設訪問を増やしても良いのではないかと思った。
- ・新しい時代の働き方というテーマとマッチしており、社員の個性や生き方を尊重する制度や福利厚生が非常に魅力的だった。

<石坂産業株式会社>

- ・資源を再現する過程においても細かい配慮がされており、社会、環境を良くしていこうという強い思いが印象的だった。
- ・廃棄物処理場の中を見るのは初めてで、森を育てている様子も新鮮だった。
- ・全く知らない業界だったため、実際に工場見学して、イメージを掴むことができた。
- ・あまり見ることでできない産業廃棄物の処理過程を見学でき、面白かった。環境への配慮が勉強になった。
- ・サステナブルな事業を実際に行っている場を見学す

ることで、新しい知見を得ることができた。

<金笛しょうゆパーク>

- ・日本伝統の醤油製法を学び、中国青年とも互いの国の文化の違いを共有するきっかけにもなった。
- ・社長の説明がとても面白く、日中青年が一体となって楽しんでいると感じた。
- ・日本でも少なくなっている伝統的な醤油の製造過程を学べて良かった。

<川越散策・コエトコ>

- ・コエトコ：川越は伝統的な街という印象があったが、新しいものをクリエイティブする取組が新鮮だと思った。
- ・川越散策：古き良きものを残すだけでなく、新しいものと融合し新しい価値を生み出していくという点に感動した。
- ・特に新しい時代の働き方に関するレクチャーが印象的で、今後の人生にいかせる要素があった。
- ・中国青年と共に日本の文化を楽しむことができた。名前入りの箸や箸置きを中国青年が楽しそうに見ていたことが印象的であった。

<その他>

- ・農作業体験：チームが自然に協力する姿勢が作られ、そのような機会はとても有効だった。
- ・芋堀り等収穫体験：青年も楽しんでくれている様子があった。
- ・埼玉県庁：表敬訪問に関わる様々なイベントを通じて、交流に関するパブリックな側面を学ぶことができた。
- ・ららぽーと富士見：中国青年のお土産選びを一緒にでき、良い時間になった。

(6) ディスカッションプログラムをどのように評価しますか。

大変良かった	5	5名						
良かった	4	6名						
どちらでもない	3	4名						
悪かった	2	0名						
とても悪かった	1	0名						
			5	10	15	20	25	30名

- ・率直な意見交換を通して、インターネットやメディアでは知ることができない中国の現状を知ることができ、大変良かった。
- ・中国の現状についても国としての見解、中国青年の個人の感覚や意見、どちらも聞くことができ、非常に勉強になり、とても考えさせられた。ディスカッション後には日本の現状や課題について、より客観的に考えることができた。

- ・日本でのディスカッションでは通訳の方の円滑なサポートによって、お互いの知りたい事を中心にきちんと対話ができた。ディスカッション時間が更に多く取れるとより充実したものになると感じる。
- ・日中の学生がそれぞれ準備していた内容に加えて、各自の経験も踏まえた意見交流ができた。限られたプログラム時間の中で、濃い内容のディスカッションができたが、ディスカッション準備の時間が無くなったため、段取りをおさえて進められなかったのは残念だった。

### 3. 中国プログラム全体について

#### (1) 中国プログラム全体をどのように評価しますか。

大変良かった	5	9名				
良かった	4	6名				
どちらでもない	3	0名				
悪かった	2	0名				
とても悪かった	1	0名				
	5	10	15	20	25	30名

- ・初めて訪れた中国であり、見るものすべて新鮮で刺激的であり多くのことを学べたため大変良かった。
- ・訪問先から伝統や歴史を学ぶことができ、また現代中国の最先端技術を目の当たりにし、中国という国家の理解も深めることができた。
- ・中国の文化を様々な場所で感じる事ができた。バスの中で、通訳の方によるガイドやユースフォーラム、総領事館で貴重なお話を聞くことができ、非常に勉強になった。
- ・スケジュールの急な変更や、想定していないことも数多くあったが、それら全てを含めて「中国」を体験できた。
- ・現在の中国が日本青年団に見せたいものが何かを肌身を持って理解できた。加えて、最大限のおもてなしを受け、心からの感謝の念を持つとともに、両国の安定的な関係構築のためにやるべきことや課題に対する理解度が高まった。

#### (2) 中国プログラムから得たこと、発見したことは何ですか。

- ・中国人のおもてなし文化、中国のあらゆる産業についての集約力と成長力、中国の歴史とそのいかし方を学ぶことができた。
- ・中国という国の国力や発展のスピードに驚いた。
- ・中国の最先端技術の発展と普及、長い歴史を持つ中国伝統文化の壮大さを学んだ。
- ・中国の青年たちが中国の歴史を尊敬し、学んでいる点が印象的であった。バスの中で西湖の詩を暗唱してくれたり、魯迅の本はほとんど読んだことがあると言っていたりした。

- ・国家の成り立ちに関する構造の特異性。他方、個人レベルで見たときには、それぞれ異なる視点を持ち、その意味において日本と大きく変わらないという当たり前の事象を再確認した。

#### (3) 中国プログラム中、最も印象に残ったのはどのようなことですか。

- ・中国の方々がしてくれたおもてなしが最も印象に残っている。
- ・ドローンや無人配送車が走っているのを見て日本社会でも参考にできると感じた。
- ・魯迅故里訪問。魯迅についても学び、日本との繋がりも感じる事ができた。
- ・杭州のホテルで、中国青年がホテルで手を振って熱烈に歓迎してくれたこと。
- ・中国青年達の陽気な明るさ。

#### (4) - 1 テーマ別視察先訪問をどのように評価しますか。

大変良かった	5	8名				
良かった	4	6名				
どちらでもない	3	1名				
悪かった	2	0名				
とても悪かった	1	0名				
	5	10	15	20	25	30名

#### (4) - 2 特に印象に残った訪問先を、印象が強い順に3つ挙げてください。

##### <杭州人工知能タウン (AIタウン) >

- ・区域の上空をドローンが飛んでおり、先進的な街の風景に感銘を受けるとともに近未来の生活をイメージできた。
- ・実際に活用されている人工知能について目の当たりにし、驚きと感動を覚えた。
- ・最先端の技術に触れ、大変面白かった。

##### <魯迅故里・魯迅記念館>

- ・魯迅の人生と魯迅に対する中国の方々の尊敬の意を感じることができた。
- ・中国青年から魯迅の代表的な作品の数々について、実際にエリアを周りながら解説をいただいた。
- ・大学の授業で学んだことを実際に目で見る事ができ、嬉しかった。
- ・魯迅と日本の関わりをはじめ、中国の伝統的風景を感じることができた。
- ・歴史的に日中を架け橋として繋いだだけでなく、当時の中国の精神性に深く警鐘を鳴らした魯迅の生涯に関して、改めて理解を深めることができた。

### <西湖夜間遊覧船体験>

- ・夜景がきれいで、中国ならではの言い回しも学ぶことができた。
- ・非常に幻想的な空間を味わうことができ、杭州という街が好きになった。
- ・夜もライトで明るい中国だが、西湖は古き良き中国の歴史を感じられる景色が広がっていた。
- ・世界遺産としての文化的価値について事前に知っていたため、この機会を得られたことについて個人的に嬉しく思った。

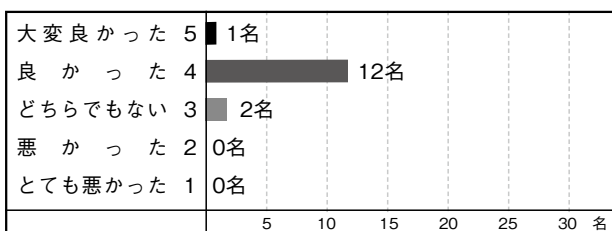
### <浙江一景エコ牧場>

- ・夜景農作業体験では、中国の農村の雰囲気を感じながら過ごした。
- ・体験プログラムが数多く用意されていて、特に日本よりも広大な農場が印象に残っている。

### <その他>

- ・浙江工商大学：中国側のパフォーマンスでもあったが、日本側のパフォーマンスに中国青年が加わってくれた瞬間は友情が形に現れた瞬間で感動的であった。
- ・中国シルク博物館：シルクの歴史と他国との交流、貿易について学ぶことができ、日本との交流についてもよくわかった。
- ・在上海日本国総領事館：大使のお話が非常に良かった。他の人にも内容を共有したい。
- ・安昌古鎮：飲食店が並ぶ古代の街並みは印象的であった。
- ・デジタルノマド交流ラウンジ：中国政府もデジタルノマドを推進していることを学べて非常に興味深かった。
- ・日中代表ユースフォーラム：日本では受けられないような中国の文化に関する講義を二つ受けることができ、更には文化に関するディスカッションで中国青年の生の意見を聞いたことは貴重な経験だったと感じる。

### (5) ディスカッションプログラムをどのように評価しますか。

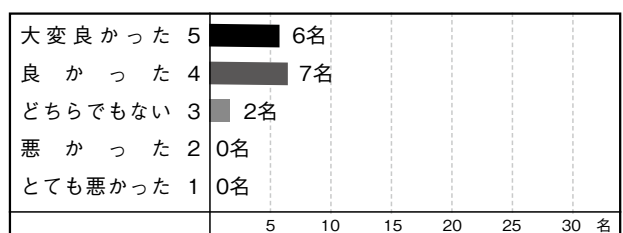


- ・テーマについて、基調講演により知識を深め、青年たちと議論を深められたことは良かったが、日本プログラムと同じグループだったため、グループを変え、より多くの青年と交流できた方が良かったと思う。

- ・時間的制約があった中で、手早く発表物を完成させることができた。日本プログラムに続き、より一層のチーム力と信頼関係を構築できた機会となった。
- ・議題が曖昧だったことや、通訳の方がいらっしやらなかったため、日本プログラム時よりは苦勞したが、翻訳アプリや論点を互いに整理することで成果物をまとめることができた。
- ・テーマ自体から日中の文化に対する捉え方の違い感じて面白かった。日本では文化を継承しようとするのに対し、中国では文化と歴史を結びつけ、その内容を現代と絡めたテーマ設定がされていたと思う。ディスカッション自体は、時間があまりなく踏み込んだ意見交換ができなかったのが残念だった。
- ・即席で時間管理して進めていかなければいけなく、またテーマについてもかなり抽象的でゴール設定を自分たちで明確にしなければならなかった。良くも悪くも同じテーマでもグループごとに全く違う議論がなされていたのが印象的だった。

## 4. 事前・出発前・帰国後研修について

### (1) 研修内容をどのように評価しますか。



### (2) - 1 研修の良かったところをお答えください。

- ・対面での研修により、自主研修において進めるべきこと、方向性のすり合わせができたことが大変良かった。
- ・事前研修で日本紹介の準備やディスカッションについてきちんと備えることができたため、大変良かった。また、青年同士で仲を深めることができ、一生の"朋友"になれた。
- ・事前研修について、あらかじめ日本代表団の一員としての自覚を持つことができて良かった。また、チームビルディングに関する時間を持てたのも良かった。
- ・日本文化紹介では話し合いや練習の時間を多く取れたので、本番でスケジュールが変更になった際も柔軟に紹介する内容を組み合わせることができた。
- ・十分な時間の団研修時間が設けられていたところ。昨年度の参加者の意見を直接聞いたところ。
- ・宮本雄二元駐中国特命全権大使と及川淳子中央大学教授、それぞれの講演が印象に残った。現状の日中両国の抱える問題とその歴史的背景について正確かつ包括的に理解を深めた上で、本プログラムの位置

付けとその中での自分自身の問題意識の持ち方と行動のあり方について、事前に整理をすることができた。

## (2) - 2 研修の改善すべきところをお答えください。

- ・より早い段階で中国側の予定や実施事項が分かれば、より準備が進められたと思う。
- ・夜解散(20:30など)の後、翌日の早朝から準備を要する部分もあり、体力的に大変な面があった。
- ・スケジュールが過密すぎた。事前・出発前・帰国後と本番に備えるためだと思うが、その前にかかなり疲弊してしまった。また、決めるべきことが決まっているのであれば、事前に指定してもらえたら効率的に準備できたのにと感じた。
- ・事前研修ではせっかく他の事業の参加青年が参加しているに交流の機会が少なかった。交流の場を更に増やしていただければと思った。

## 5. 事業を終了して

### (1) 今後、この事業の経験をどのようにいかしていきたいですか。

- ・中国青年と顔の見える関係を築けたこと、多様な視点で中国を見ようという姿勢を身につけたことが本事業に参加して得られた大きな成果だと思う。今後は、中国と関わる時には多面的に物事を見るように心がけたい。また、中国青年の顔を思い浮かべながら仕事したいと思う。
- ・今回の事業は国と国との公式な交流プログラムであるため、表敬訪問や歓迎会など、「外交」の場を経験したことを今回の事業に参加していない人に共有したい。
- ・事業を通して学んだことや経験を周囲の人に伝えていきたい。大学の後輩やサークルのメンバーに経を伝え、同じように国際交流に参加してほしいと思う。また、これからも言語や文化などを学び続け、意欲的に国際交流事業に参加したい。そして、今回出会った日本と中国の青年とも交流を続け、日本と中国の友好の架け橋となれるよう努めていきたい。
- ・まずは今回のプログラムを通して得た交流に関する知見をいかして、日々の活動から、国際的な交流活動まで、主体性を持って交流に従事していきたい。また、中国に関する具体的なイメージを得ることができたので、こちらは漢方に関する学びや、中国人との交流などにいかしていきたい。
- ・将来的に防衛関連の業務をしていこうと考えている者として、どういった価値とそれに立脚した政治システムが望ましいかという問題意識を今後もさらに持ち続けるということである。本プログラム全体を通して、様々な場所を訪れ、多様な視点を共有した

からこそ得られた問題意識や発見を、さらなる成長の礎としたい。

## (2) その他、この事業の感想や事業に対する意見・提言があれば記入してください。

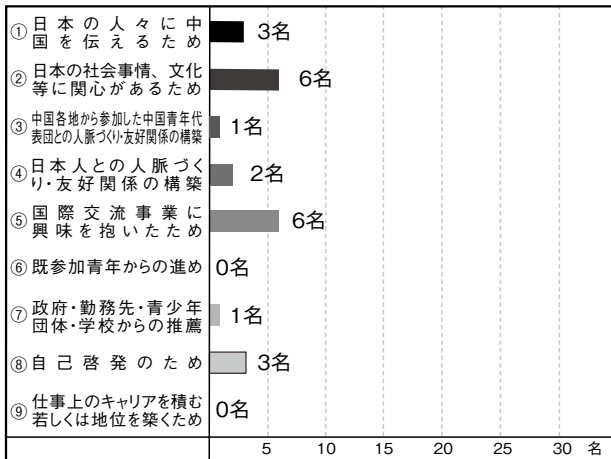
- ・多くの学びが得られる貴重な機会であった。今回、中国人は学生だけの参加であったため、日本側同様、社会人の方の参加もあれば、より広く深い議論が交わせるのではないかなと思う。
- ・一生の絆を獲得できた、まさに最高の日中交流事業だった。より多くの方から応募をいただけるよう、大学側にも呼びかけて共同で広報活動してもよいのではないかなと思う。
- ・日数がもう2~3日長くてもいいと思う。
- ・今事業に関わってくださった全ての関係者の皆様に、心より御礼申し上げる。貴重な経験をご提供いただき、ありがとうございました。

## II 中国参加青年アンケート

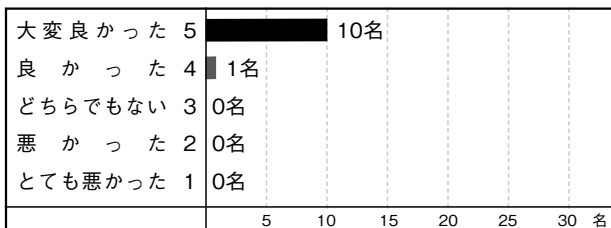
アンケート対象者：団長、副団長、秘書長を除く中国参加青年（18名中11名）

### 1. 全体評価

(1) あなたは、なぜこの事業に参加したのですか。  
(1～2つ選択可)

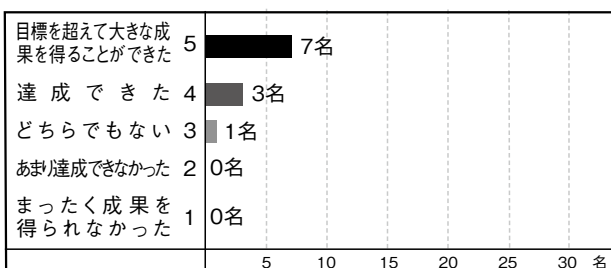


(2) 事業全体をどのように総合評価しますか。



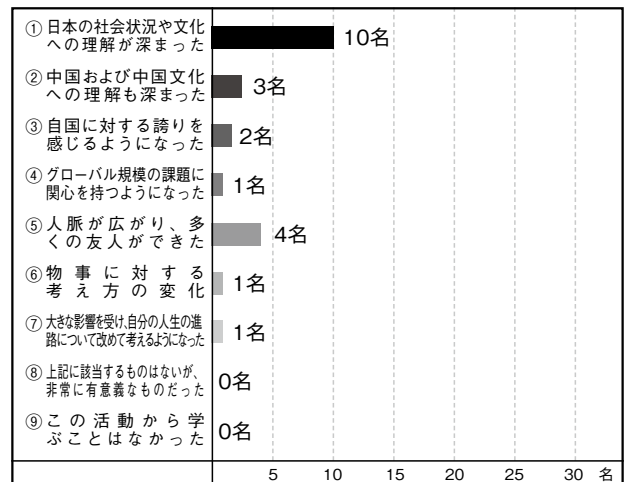
- ・今回が初めての国際交流活動であり、また初めての日本訪問だったが、とても良い経験であった。
- ・内容の構成が非常に充実しており、現地での交流や実地見学を通じて、多くの学びを得ることができた。
- ・チームの雰囲気はとても良く、皆が一丸となって取り組んでいた。ただし、運営面では改善すべき点もあり、例えば連絡の発信が遅れがちであったことなどが挙げられる。
- ・非常に満足している。友情を得ると同時に、中日両国の文化や将来の働き方の違いについても理解を深めることができた。

(3) この事業に参加するにあたって、あなたの目標は何でしたか。また、その目標は達成できましたか。



- ・多くの新しい友人と出会い、日本への理解がより深まった。
- ・多くの友人を得て、交友関係が広がった。

(4) 以下の①～⑨までに掲げる項目に関し、この事業全体を通じて得られた自らの成長等への効果について、該当すると思われるものを選択してください。(1～2つ選択可)



- ・これまで日本を訪れたことがなかったが、今回の訪問で中国とは大きく異なる点を多く目にし、日本人と中国人の考え方や行動様式の違いも実感した。また、中国の若者たちとも深い友情を築くことができ、目標は達成できた。
- ・これまで以上に日本社会や日本の友人と深く接することができ、活動を通じて目標を達成できた。
- ・日本の伝統文化がどのように発展してきたのか、現代の働き方や異なる価値観を理解したいと思った。また、日本の若者と深く交流し、深い友情を築きたい。さらに、自分の専門分野をいかして、楽曲を一曲制作したいという思いもあった。
- ・日本の現代企業や働き方を理解し、日本の若者が中国をどのように見ているのかを知ることができた。目標は概ね達成できた。

(5) この事業を通じて、あなたと日本の人々との相互理解が深まったと思いますか。

- ・非常に効果がある。中日両国の若者が対面で交流することは非常に有効であり、互いの考えを深く理解できるだけでなく、交流を通じて深い友情を築くことができた。
- ・参加者同士の間では、確実に理解が深まったと思う。ただし、今後はさらに対象範囲を広げていく必要がある。

- ・効果はあると思う。今回の交流活動は、種をまくようなものだと感じた。将来、花が咲き、豊かな成果につながっていくと思う。
- ・一定の効果があると思う。交流や学びを通じて、本当の中国の姿を日本の方々に伝えることができた。私たちの発展目標や、平和で友好的な関係を追求する姿勢は一貫している。同時に、日本の現代的な働き方や企業文化を中国の若者に紹介することもでき、相互に学び合い、参考にすることができた。

## 2. 日本での各種活動について

### (1) 総合評価

大変良かった	5	9名
良かった	4	2名
どちらでもない	3	0名
悪かった	2	0名
とても悪かった	1	0名
		5 10 15 20 25 30 名

- ・この数日間の経験が忘れがたく、名残惜しさを感じるほど深く心に残った。
- ・活動内容が多層的で、バリエーションに富んでいた。
- ・非常に満足している。日本側の運営は整然としており、よく組織されていた。
- ・多くのことを学んだ。ただ、時間配分についてはもう少し柔軟性があってもよいと思う。例えば、必ず一度ホテルに戻ってから自由行動にする必要があるかどうか。安全確保のためであることは理解できるが、貴重な交流の機会でもあるため、日本の様々な風景をもっと見られるよう、適度な調整があればより良かったと思う。

### (2) 開催期間について（「3：適切」が最高評価）

短い	5	1名
やや短い	4	6名
適切	3	3名
やや長い	2	2名
長い	1	0名
		5 10 15 20 25 30 名

### (3) 日程構成について（「3：適切」が最高評価）

詰まっている	5	0名
やや詰まっている	4	5名
適切	3	6名
やや時間が余る	2	0名
時間が余る(休憩時間が長い)	1	0名
		5 10 15 20 25 30 名

- ・全体的にとっても良かった。
- ・日本と中国の両方で、それぞれもう数日滞在できる

と良いと思う。現状では日程がややハードに感じられた。

- ・各実地体験の時間がやや短く、また時間配分についてももう少し柔軟性があると良いと感じた。
- ・昼休みの時間を適度に設けていただけると良いと思う。
- ・活動全体の期間をもう少し延ばし、より深い体験ができるとさらに良いと思う。

### (4) 東京プログラム（東京観光）

非常に満足	5	11名
満足	4	0名
普通	3	0名
やや不満	2	0名
不満	1	0名
		5 10 15 20 25 30 名

- ・満足している。日本側の青年はとても熱心であった。
- ・とても良かった。東京はとても美しい街だった。
- ・バス観光はとても楽しく、友人たちと会話を楽しむことができ、相互理解を深める良い機会であった。
- ・東京での2日間の行程を通じて、国際的でファッション性の高い大都市としての魅力と活気を感じることができた。また、学習や日中青年との交流を通じて、日本人々の温かさも実感した。
- ・参加者同士が知り合ったばかりの時期には、もっと交流したい気持ちが強く、そのため景観の鑑賞や文化学習に十分な時間を割けない場面もあった。結果として、時間が足りないと感じることがあった。

### (5) 東京プログラム（株式会社パソナ JOB HUB）

非常に満足	5	10名
満足	4	1名
普通	3	0名
やや不満	2	0名
不満	1	0名
		5 10 15 20 25 30 名

- ・非常に満足している。見学や意見交換も楽しく行うことができた。
- ・日本企業の内部を実際に見学できたことは、全く新しい体験であった。
- ・現在の日本における新しい働き方や考え方について学ぶことができた。日本ではフリーランスという働き方が広く受け入れられており、複数の仕事を掛け持ちしたり、旅行をしながら働いたり、オンラインでリモートワークを行ったりすることが可能である点が印象的であった。
- ・この企業についてより深く理解することができ、多くの学びがあった。一方で、見学時は説明する社員

一人に対して青年の数が多かったため、説明が聞き取りにくい場面もあった。

#### (6) 東京プログラム (ディスカッション)

非常に満足	5	11名				
満足	4	0名				
普通	3	0名				
やや不満	2	0名				
不満足	1	0名				
	5	10	15	20	25	30名

- ・意見や考え方のぶつかり合いがあり、自分自身を啓発する良い機会となった。
- ・異なる視点から、同じ課題や問題を理解することができた。
- ・中日青年の交流会では、新しい働き方や伝統文化などの面で、互いの違いがはっきりと感じられた。その違いの中にはとても興味深いものも多く、文化の違いによってさまざまな表現や考え方が生まれるのだと理解・共感することができた。
- ・参加者同士で効果的な交流とコミュニケーションができたと思う。言語面で多少の壁はあったが、それを乗り越えて交流することができ、実質的な相互理解の進展を感じた。
- ・双方の意見交換や議論の内容が多く、討論の時間がややタイトに感じられた。

#### (7) 埼玉プログラム 11月6日 (石坂産業株式会社訪問等)

非常に満足	5	11名				
満足	4	0名				
普通	3	0名				
やや不満	2	0名				
不満足	1	0名				
	5	10	15	20	25	30名

- ・とても良かった。環境保護に関する知識を多く学ぶことができた。
- ・この環境保護産業の取組に強く共感した。将来の新たなトレンドだと思う。施設内で産業全体の流れを見ることができ、細部まで行き届いた設計や環境保全への配慮には感嘆し、非常に感銘を受けた。
- ・全く新しい体験で興味深い内容であった。
- ・人への配慮と環境保護の理念は学ぶべき点が多いと感じた。
- ・スタッフの方々がとても親切で、高度な循環利用の取り組みに大きな刺激を受けた。

#### (8) 埼玉プログラム 11月7日 (農業体験、川越散策等)

非常に満足	5	9名				
満足	4	1名				
普通	3	1名				
やや不満	2	0名				
不満足	1	0名				
	5	10	15	20	25	30名

- ・グループメンバー同士の交流を深める良い機会となった。また、埼玉の現地の方々に参加して下さったことで、グループの多様性が高まり、個人的にも最も印象に残ったプログラムの一つである。
- ・現地での農業・食体験のプログラムはとても興味深いものであった。私自身、中国の農村で育ったため、これらの体験自体は決して初めてではないが、今回改めて日本の農業と食に触れたことで、新たな視点を得ることができた。シンプルな農業であっても、このような形で観光や農産物体験として展開できる点は大変示唆に富んでおり、強い刺激を受けた。川越の街歩きでは、深みのある伝統文化を感じることができ、街道沿いに残る歴史的な建築物から、まるでその時代にタイムスリップしたかのような感覚を味わうことができた。とても心に残る体験であり、その過程で日本の若者たちとも深い友情を築くことができた。
- ・川越散策は特に素晴らしかった。
- ・実際に現地で体験したことで、理解や印象がより一層深まった。
- ・散策時間がやや短く、十分に体験する時間がなかったと感じた。

#### (9) 埼玉プログラム 11月8日 (金笛しょうゆパーク等)

非常に満足	5	10名				
満足	4	1名				
普通	3	0名				
やや不満	2	0名				
不満足	1	0名				
	5	10	15	20	25	30名

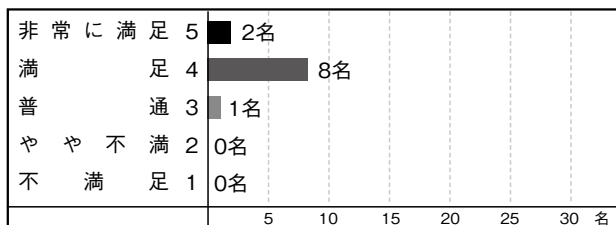
- ・とても興味深い見学であった。金笛しょうゆパークにて社長が、豊かな身振り手振りや生き生きとした表情で説明して下さり、醤油作りの大変さと奥深さを実感した。
- ・職人精神に深く敬意を抱いた。
- ・技術や技法が受け継がれている様子を見ることができた。

(10) 日本滞在中に、最も印象に残ったことは何ですか。

- 日本生活様式は非常に洗練されており、日本人々はとても礼儀正しと感じた。
- 日本社会の秩序や、規律を守る姿勢が強く印象に残った。
- 日本学生との交流や、パソナの見学。これは中国国内ではあまり見ることのないタイプの企業だったため、特に印象的であった。
- 川越でグループのメンバーと散歩しながら文化の違いについて話し合い、異なる言語で交流できたことが多様でとても興味深かった。
- 日中両国のパフォーマンスや交流の場で友情が生まれ、考え方の刺激や意見のぶつかり合いを感じることができた。

### 3. 事業を修了して

(1) 本事業に参加した後、日本に対する印象に変化はありましたか。



- これまで日本については、主に歴史やニュースを通じて知っている程度で、詳しく理解していなかった。今回実際に日本を訪れ、日本の風土や雰囲気や直に体感できたことをとても幸運に思う。日本の若者との交流を通じて理解が深まり、特に日常生活の中で、日本人々の親切さや礼儀正しさを強く感じた。
- 以前から日本の社会や文化に強い関心を持っていたが、今回深く体験したことで、今後も継続して体験したいという思いがより強くなった。これは、以前から自分がずっとやりたかったことだと改めて感じた。
- 日本は秩序が整った国であり、礼儀やマナーの面でも非常によく行き届いていると感じた。
- 両親が日本に留学していたこともあり、幼い頃から日本に対して良い印象を持っていた。環境や食文化などの面でも以前から好意的に感じていた。
- 活動に参加する前からある程度日本について理解していたため、印象に大きな変化はなかった。

(2) 今後、この事業の経験をどのようにいかしていきたいですか。

- 今回の経験を日本についてあまり知らない身近な友人に伝えたい。また、機会があれば日本を訪れ、実際に生活してみることも勧めたい。日本人々の細部まで行き届いた配慮や、時間を厳守する姿勢から多くを学び、今後は自分自身もそのような考え方や行動を意識していきたい。
- 異文化コミュニケーション、語学力の証明、留学申請など。
- 論文の執筆、SNSや記事の発信、また親しい友人や家族への共有などに活用したい。
- 将来の働き方や伝統的価値観について考える中で、「人を中心とした発展」という視点の大切さを実感した。今後の仕事においても、この考え方をさらに実践していきたい。

(3) その他、この事業の感想や事業に対する意見・提言があれば記入してください。

- 活動期間延ばし、参加者の構成もより多様にすることで、交流の範囲を広げられると思う。
- 日本側とのグループ分けをさらに増やし、より多くの日本側参加者一人一人と幅広く交流できる機会があるとよい。
- 本活動が長く継続されることを期待する。また、交流・訪問の期間を適度に延ばし、各地域で10日程度確保できれば理想的だと思う。5日間ではやや短く、体験や交流が十分に深まらない部分があった。
- 夜のプログラムをやや減らし、全体の期間を延ばして、夜の時間を各自の学びを振り返る時間に充てるのが良い。
- 全てのスタッフ及び参加者の皆様のご尽力に感謝申し上げます。とても素晴らしい思い出となった。

### III 総括評価

最後に、アンケートの総合評価を含めて、今回の総括評価をまとめる。

〈日本参加青年〉

「事業全体をどのように総合評価しますか[1-(2)]」との問いに対して、日本参加青年は全員が5段階評価の4(良かった)以上を付け、極めて高い評価であった。

日本参加青年からは、「事業は一般的な国際交流活動に留まらず、表敬訪問や中国青年との密な交流等を通じて、多角的な面から中国を捉えることができた。中でも中国青年との交流は文化や価値観を超えた青年同士の率直な意見交換の場だった。このような体験は、内閣府主催ならではの活動だと強く感じた。」「(両国の青年同士の)一生の絆を獲得できた」といった声が多く寄せられた。

また、「これまで中国へのイメージは、メディアや他人からの話で形成されたものだったが、今回のプログラムで実体験をとおして大きく変わった。異文化について、自分の目で見て相手を理解し尊敬するという姿勢を身につけることができ、考え方が変わった」「中国社会への理解が深まったとともに、私が想像してきた中国の姿と実際の姿の差異から中国への真の意味での解像度が上がった。」など、実際に訪中し、中国という国を五感で感じた経験や、中国の青年との密度の高い交流を通じて、自身の中にあった中国に対するステレオタイプが打破されたと感じる声が多く挙がった。

今後、この事業の経験をどのようにいかしていきたいかについては、「これからも言語や文化などを学び続け、意欲的に国際交流事業に参加したい。そして、今回出会った日本と中国の青年とも交流を続け、日本と中国の友好の架け橋となれるよう努める。」「中国青年と顔の見える関係を築けたこと、多様な視点で中国を見ようという姿勢を身につけたことが本事業に参加して得られた大きな成果。今後は、中国と関わる時には多面的に物事を見るように心がけたい。また、中国青年の顔を思い浮かべながら仕事したい。」など、事業で得られた学びを糧として、将来の両国の架け橋として成長していこうとする意欲あふれる、熱のこもったコメントが多く寄せられた。

以上の結果から、「青年相互の理解と友好の促進を図り、両国の架け橋となる青年を育成する」という本事業の目的に対して、昨年度に引き続き、本年度も十分な成果を収めたものと評価することができる。

両国の参加青年は、今後、それぞれの道を歩んでいく。将来、青年たちが進む分野は、多種多様であろうが、事業を通じて得た学びや経験、人脈をいかしながら、国際社会や日本の地域社会において、それぞれのフィールドをけん引する人材として活躍することが期待される。

# 内閣府青年国際交流事業報告書 2025

## 令和7年度 日本・中国青年親善交流事業

---

発行：内閣府

〒100-8914

東京都千代田区永田町1-6-1

TEL：03-5253-2111

URL：<https://www.cao.go.jp/koryu/>

---

編集：一般財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103-0013

東京都中央区日本橋人形町2-35-14

東京海苔会館 6階

TEL：03-3249-0767

URL：<https://www.centerye.org/>

---

印刷：株式会社 長正社